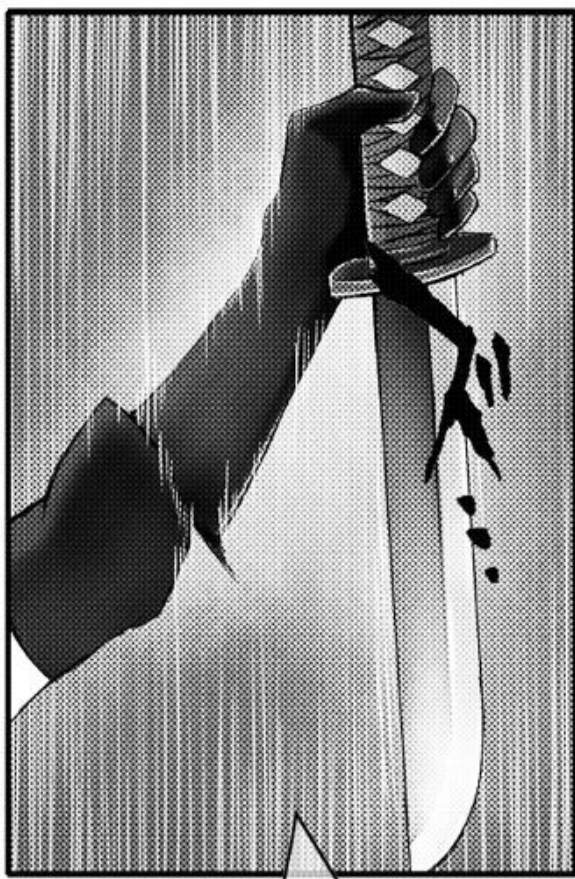












いやあああああああ
ああつ!!

まったく

乳もケツもエロそうに
しやがってよおっ!



悪いが、無理な話だ。
個人的な恨みはないが
こちとら仕事なんでね。



や・・・めつ。
たすけ・・・て!

おいおい、今更命乞い
とはねえ・・・



絶命奥義　く屍遊びく
快感を与え続けた後、既に斬られた
肉体は徐々に崩壊。更には精神さえ
も破壊し、極楽と地獄を味わい
ながら逝く。

腕を斬り落とした時には
もう既にてめえはこの技を受けて
動く死体も同然だったのさ。





残酷非道な技故、禁じられた技だが、子供
さえも手に掛けるあんたのような下衆には
ちよいどいい技だ。
あの世でこれまでの非道を悔いな。

そして――



ナンバー2。
次はあんたの番だぜ。

「ちようど終わったようね」

駆け付けた始末屋仲間の女が男へ駆け寄ってくる。

「そっちは？」

「雇われの浪人とは言ってもほとんどが素人同然の腕前。おまけに女相手だと思っただけで全員ナメてかかってきたからバラしてやったわ」

男は半笑いを浮かべ、再び女の亡骸に目をやった。

「まあ、しかし、だ。悪行を重ねてきたとはいえ勿体ねえことをしちまったな」

「死んで当然じゃない、こんな女」

女は口を尖らせた。

「道を踏み外さなければ、每晚お願いしたいぐらいの身体の娘だったぜ。しかも噂じゃ、名のあるところの娘だって話だ。まっ、単なる噂に過ぎねえが……」

「ふう〜ん」

女はしばし亡骸を見つめた後、何かを思いついたのかうすら笑みを浮かべ

男の顔を覗く。

「ねえ、この女になってあげようか？」

「はあっ!？」

「私がこいつを着るの。そうすればこの女の身体をやり放題じゃん。中出しされるのだけは勘弁だけど」

「ばっ、ばかなこと言ってるねえで捕まってるガキ供を連れてさっさと帰えるぞ。いつまでもこんなところで油を売ってられねえ」

男はあきれ顔交じりに足早にその場を去った。

「まったく、冗談だったのに……」

女は笑みを浮かべる、が、すぐに未だビクついた女の亡骸に視線をやった。

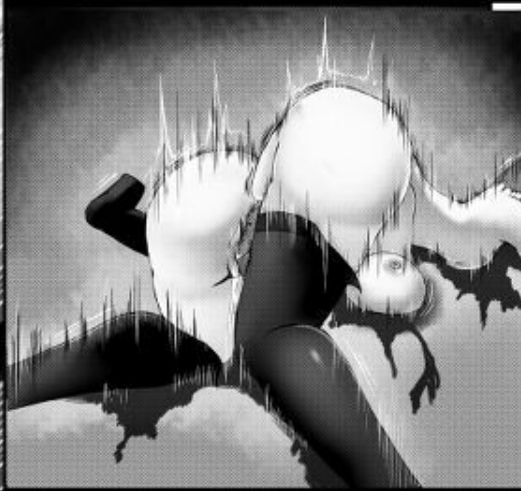
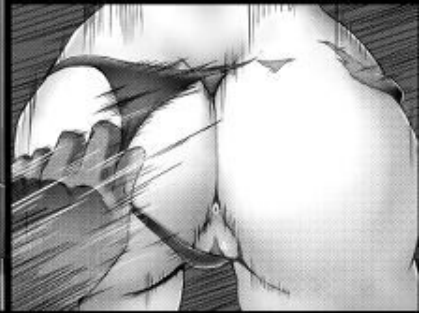
「醜い最期なこと……でも、一度あんたのような良い身体を着てみたいのよねえ。あんたのお尻、唇、胸……そう、お前の身体ならあいつを私のモノに出来そうなの。だから……」

女は狂気にも似た笑みを浮かべると、そっと亡骸の大きな乳房を触りだした。

「なんて柔らかくて、綺麗な肌。それにとても大きく。こんな肌に他の不要なモノは必要ないわよねっ!」
女はまるで獣の如く、飛び出した臓物・肌に張り付く女の肉、そして骨をも抉り出していく。

「中身は後でちゃんと肥料や家畜の餌にでもしてあげるわ。そして地獄から魂の抜けた身体が行く末を見守り続けるといいわ。ふふふっ」







…うっすうっすん

お母様にいただいたやつ、これじゃあ小さくて
胸がはみ出ちゃうよお…

